

Title	ブレヒト劇における母たち
Author(s)	三上, 雅子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/46587">https://hdl.handle.net/11094/46587</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	三 <sup>み</sup> 上 <sup>かみ</sup> 雅 <sup>まさ</sup> 子 <sup>こ</sup>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19832 号
学位授与年月日	平成17年10月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	ブレヒト劇における母たち
論文審査委員	(主査) 教授 林 正則
	(副査) 教授 森岡 裕一 教授 永田 靖 助教授 三谷 研爾

### 論文内容の要旨

本論文は、ブレヒト(1898-1956)の演劇作品を一貫して特徴づけている「母」の形象に注目し、「母胎としての母」が「社会変革の担い手としての母」へと大きく変容して行くプロセスを、具体的な演劇作品の分析によって明らかにしようとしたものである。

まず序では、ブレヒト作品の母親像に関する先行研究を概観し、マルクス主義、精神分析、フェミニズム論等からする論を略述し検討している。第1章では、ドイツ近代劇の歴史を振り返り、「市民劇」以降、つねに父-娘(息子)の関係が中心テーマをなし、母親が不在、あるいはきわめて影の薄い存在であったことの意味を問い、家父長制が実質的に崩壊したのちも、イデオロギーとしてドイツ演劇を支配し続けた事実を検証している。

第2章では、ブレヒトが早くから「父を欠いた母と息子」のテーマに拘り、例えば『母親と死』(1916)という掌篇の「自己の命と引きかえに息子の命を世に送り出す母」の姿に作家の原風景があるとす。そして、やがて彼がいっさいの社会現象を自己の文学から排除する方向へと向かい、初期の『家庭用説教集』等アウトサイダーたちが彷徨する作品では、「社会的属性を剥奪された母胎としての母」が作品世界を彩っていることに注目する。

第3章では『家庭用説教集』所収のパラーデ『アプフェルバク、または野の百合』(1919)を詳細に分析し、母胎としての母との共棲から離脱することができない少年の姿を自己と重ね合わせて描いた若きブレヒトにとって、母との関係を社会的文脈において問い直すことこそが、その後重要な課題となるに至る経緯を考察している。

第4章では、表現主義の代表的戯曲『息子』(W. ハーゼンクレヴァー)と対比しつつ、ブレヒトの『結婚式』(1919)や『三文オペラ』(1928)における茶番としての結婚式という設定に彼特有の「醒めた認識」を見て、やがて1926年頃から急速にマルクス主義へ接近してゆく彼の演劇世界がブルジョア批判から禁欲的教育劇の世界へと変貌し、いったん背景に退いていたかに見える「母-息子」の図式が再び前面に出てくる経緯を辿り、母親の形姿が初めて社会的矛盾とそれへの闘いというテーマと関わって登場する『母』(1930)は、テーマのみならず手法においてもブレヒト劇の展開を画するものとなったと述べる。

第5章で資本主義的疎外の原型としての娼婦を主人公とする寓意劇『セチュアンの善人』(1941)を取り上げ、「商品としての愛」から「真の愛」への逃亡の試みとその挫折を通して、ブレヒトが時代の不幸を描こうとしたことが論じられ、母となりながら母であることを拒まれた存在としての主人公シェン・テは、ブレヒト劇の母たちの中でも際立って特異な存在であることが述べられる。

第6章では『肝っ玉おっ母とその子どもたち』(1941)について、作者の否定的意図と観客の肯定的受容のずれが

論じられる。弁証法的な内的葛藤を抱え込んだ重層的な人物像としての「肝っ玉」を、娘カトリンという肯定的な存在の側から照らし出すことで否定的母親像、即ち「社会的認識を欠いた母性愛を持つ犯罪性」を暴くという作家の意図が検証される。

第7章では『コーカサスの白墨の輪』が取り上げられる。劇中劇という構造原理は、内枠の物語を「異化する」手法であり、「歴史化」に他ならない。真の母親たる資質を備えた「育ての母」としての主人公を破滅に追いやるようにする世界のグロテスクさを浮き彫りにする大胆な劇構成によって、ブレヒトは「母でない他者が母となる」ドラマに必然性を与えたとし、この作品を「ドラマ化された叙事詩」としてブレヒト劇の大きな達成であると評価し、戦後社会に託したブレヒトの希望がそこに鮮やかに息づいていると述べる。

こうして本論文は、父親たちのドラマが支配していたドイツの演劇はブレヒトによって初めて、家父長的なイデオロギーの呪縛から真に解放され、「母のドラマ」という新しい地平を拓いたと結論づけている。

論文は、序、7章からなる本論、結論、欧文要旨、文献表から構成され、全体でA4判120頁(400字詰め原稿用紙換算で432枚)である。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、ブレヒトの演劇作品に特徴的な「母親」の形象に注目し、一方ではそれをブレヒトの創作活動の深化の指標としてあとづけるとともに、他方ではブレヒトがドイツ近代演劇の歴史のなかに占める独特な位置を確認しようとした労作である。

議論の中心は、『結婚式』にはじまり、『母』、『セチュアンの善人』、『肝っ玉おっ母とその子供たち』を経て『コーカサスの白墨の輪』にいたる5篇の作品の詳細な分析におかれている。しかし、初期の作品や『家庭用説教詩集』所収の詩『アプフェルベク、または野の百合』をも視野におさめ、また必要に応じて『三文オペラ』『ガリレイの生涯』『プンティラ旦那と下僕マッティ』『亡命者の対話』など他の重要作品にも言及していくことで、ブレヒトの文学世界全体を通観するスケールの大きな論述が、作品のディテールの分析をいっそう精彩あるものとしている。

同様に、18世紀における市民悲劇の成立から、リアリズム演劇の頂点を経て表現主義演劇にいたるドイツ近代演劇の歴史を適宜参照することで、叙事演劇の手法と「母—子(息子)」のモチーフによって開かれるブレヒト固有の世界の相貌が明らかにされている。すなわち、ドイツ演劇はブレヒトによって始めて、家父長制イデオロギーから解放された「母のドラマ」の可能性を手にした、というのが著者の結論である。

ドイツ近代演劇を「母親の不在」という観点からとらえるとき、くりかえし母親の形象化に挑んだブレヒトは異例の存在である。ブレヒトにおける母親の形象化が、実際、各作品においてどのように行われているのかを、具体的に検証した本論文は、そのテーマ設定の明確さと鮮やかな作品分析によって、すぐれた成果を挙げている。

こうした論旨の根底にあるのは、ブルジョワ社会の矛盾の本質を家父長制イデオロギーのうちに見いだし、そこからの解放を模索する思考であろう。こうしたベクトル自体の正当性は最初から自明のものとされ、各作品ともその観点から明快に解釈されていく。しかしそのために、「母性」「本能的母性(愛)」「社会的母性」といったキー概念そのものについて、ある程度は行間から窺い知ることができるにしても、それらを批判的に検討する場所が設けられおらず、議論をやや平板なものにしている嫌いがある。

とは言え、本論文はブレヒト演劇の全体像を捉え直すさまざまな新しい視点を提示するものとして高い評価を与えることができるものであり、よって本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。